

みなさま、おはようございます。国際教育センターの菅原と申します。今年度のフォーラムの趣旨を簡単にお話させて頂きたいと思います。

このところ、残念ながら子どもをめぐる悲しい事件が多く報道されております。このフォーラムは、昨年、一昨年、「特別の教育課程」を扱ってきましたけれども、今年度は、言葉や勉強のサポートがうまく機能していくための基盤として、子供達が安心して生きられる環境を整備するという点に着目しました。そして選択したのがスクールソーシャルワークでした。

「外国人児童生徒」への支援を考える時には、その「外国人」であるということにフォーカスする、つまり「日本の子供とは違う。だから支援が必要だ」というものと、「児童生徒」に焦点を当て、学校という社会の中で成長することを支えるというものの二つのアプローチがあるように思います。その後者がスクールソーシャルワークと考えられます。

文部科学省は、2008年からスクールソーシャルワーク活用事業というのを始めております。スクールソーシャルワークの導入の背景には、問題行動の増加ですとか、子供を取り巻く環境の変化など、今までの生徒指導では対応できない事案が増えているという現実があります。こうした状況に対応するには、家庭、学校、友人関係、地域社会などの児童生徒が置かれている環境に働きかけて支援を行うという役割を果たすスクールソーシャルワークというものが必要だ、ということを導入の理由をあげております。(ppt2)

一方で、文化が異なるというところに焦点を当てたものでは、石河久美子先生が多文化ソーシャルワークということを提唱していらっしゃいます。スライドに石川先生の多文化ソーシャルワークの定義をまとめてみました (ppt3)。そして、多文化ソーシャルワークが必要な背景をこんなふうにまとめています。「今まで日本で暮らす外国人住民にずっと関わってきた方達、生活を支えてきた方達の多くはボランティアである。でも、現実には、そのボランティアの方達の、なんといいましょうか、がんばりの限界を超えるような事案が多くなってきた。だから、専門家が必要なんじゃないか」と。外国につながる子どもたちの支援に関わっている皆様とお話をしていても、「自分がここまで関わっているのか」「こんな深刻の問題の相談に自分のような素人のボランティアが答えていいだろうか」と感じたことがあるとおっしゃる方がいますので、みなさまの中にも共感される方が多いのではないかなと思います。

この中で、石河先生は多文化ソーシャルワークの実践として、このように (ppt4) 示しているのですが、その中の「児童福祉」にあたるところで外国人児童生徒の問題を巡ってはスクールソーシャルワーカーの存在が強く求められると書いています。ここに、多文化スクールソーシャルワーカーというようなものの必要性というのが示されているように思います。そもそも、学校を中心にして地域と家庭を繋いで子ども達を支えていくのは、外国人児童生徒支援の中で常にずっと大切なことだ必要なことだと言われてきました。文科省がスクールソーシャルワーカーの配置の拡充を目指すとっておりますが、その、家庭・学校・地域を繋ぐという専門性のあるスクールソーシャルワーカーが学校に配置されるということは、外国に繋がる子ども達を支える上でとてもプラスであろうと思います。ただ、配置されたら全部お任せで大丈夫とはいえないのは、明らかなことだろうと思います。スクールソーシャルワーカーという専門家を外国人児童生徒の支援の輪の中に、迎え入れることで支援をより手厚いもの・幅広いも

のにしていくことが可能になるのではないかと思います。今までの外国人児童生徒支援にスクールソーシャルワークの専門性が入ってくる。この緑色の部分が先ほどお話したような「多文化スクールソーシャルワーク」とでもいうような領域に入ってくると思います (ppt6)。実は、この緑色の部分の中にも同じようなベン図が描けて、そこにはきっと外国人の子ども達の支援とスクールソーシャルワークの専門性の共通項とそうではないところがあるだろうと考えています。いずれにしても、様々な外国人児童生徒支援者とスクールソーシャルワーカーがチームを組んで経験や知恵などを提供しあって支援にあたる必要があるだろうと考えました。今、チームと申しあげましたけれど、チームを組むためにはチームを組む相手をよく知らないといけないと思うのですが、実際のところスクールソーシャルワーカーの仕事は、漠然とイメージはできるもののその専門性とか具体的な動きということになると、今一つ、よく分かってないと感じました。そこで、このフォーラムでは共に支援にあたるスクールソーシャルワーカーについて知機会を設けました。実際に、スクールソーシャルワーカーはなにをする人なのか、どんなことを得意としていて、問題にどんなふうにアプローチしていくのがスクールソーシャルワーカーなのかということを知りたいと思いました。それが午前の部です。その上で、先ほど来、お話していただきますように、外国人児童生徒支援の中では、もうすでに地域と学校を結んで家庭を支えるという動きをしているところがいくつもあります。そうした場にスクールソーシャルワークはどのようにかかわっていけるのかという点について、まず事例をお話頂き、続いてパネルとして進めて、考えていきたいと思っております。これが午後の部分です。これによって、今まで外国人児童生徒の支援に関わってきたみなさんとこれからたぶん学校等に着々と配置されていくだろうスクールソーシャルワーカーさんが良い関係を作っていき、良いチームを作り上げていくための足掛かりになれば、と思います。またこれからスクールソーシャルワーカーがどんどん養成され、配置されていきますけれども、その時に、多文化の子どもや社会に対応できることは、スクールソーシャルワーカーのとても大切な資質の一つだと思いますよということにより明確に訴えていけるようになれば、結果的に子ども達のよりよい支援に繋がっていくのではないかと考えて、このフォーラムを企画しました。

その趣旨に則って、御登壇願うことにいたしましたのは、4名の方々です。馬場先生と梶谷先生はスクールソーシャルワークを専門にする方で、先ほどの図でいくと黄色に属する方です。馬場先生は、日本のスクールソーシャルワークはもちろんアメリカの事例などもご存じの方ですし、梶谷先生は実際に外国の子ども達が比較的多くいる地域でスクールソーシャルワーカーとして活動されている方です。それから、田中先生、原先生は、青チームに属する、学校と地域を繋いで支援にあたっていられる方々です。このような形で緑の部分をもどのように深めていけるのか、支援に向けてどのように動いていけるのかということについて、午後のディスカッションで考えていきたいという計画でございます。

1日、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【参考文献】

石河 久美子 (2012) 『多文化ソーシャルワークの理論と実践－外国人支援者に求められるスキルと役割』 明石書店